

はじめに

●——社会学の存在理由

インターネットのポータルサイトには時々刻々、ニュースのトピックスが現れては消えていく。そのニュースに興味を感じるならば、トピックスをポイント・アンド・クリックすればよい。この新メディアにおけるニュースへのアクセスは、旧メディアにおけるニュースへのアクセスとそう違ってもいない。毎朝玄関のポストに、新聞が投げ込まれる。おもむろに紙面を開いては、興味を覚える記事を読む。長年それが、多くの人々が続けてきた習慣であった。今日では新聞は、人々から見放されつつあるという話をよく耳にする（わたし自身新聞を開く時間は、確実に短くなってきている）。しかし新聞の体裁とポータルサイトのニュースの体裁は、基本的に似通っている。というのもインターネットのニュースの大半は、新聞社（や通信社や放送局）の記事から構成されているからである。したがって「新聞が消える日」は、実際には「ニュースそのものが消える日」といつても過言ではない。

一般に新聞は、政治面、経済面、国際面、社会面、家庭面、文化面、スポーツ面などの紙面からなっている。このうち社会面は、第三面とも呼び慣わされている。これは新聞が四ペ

ージであったころ、三ページ目に社会記事を載せたことに由来する。そこから社会面の記事を、三面記事と呼ぶ習慣も生まれた。そして三面記事という言葉には、明らかに侮蔑的なニュアンスが含まれている。要するに社会面は、大して重要でない、雑多な出来事を扱う場所というのである。しかし同時に、社会面は多様な出来事をトータルに扱う姿勢をもっていることが注目されてよい。各新聞社の調査では社会面は、第一面やテレビ面と並んで「接触率」の最も高い紙面であるという結果が出ている。すなわち社会面は、読者に最も好まれている紙面の一つであるということである。三面記事という言葉に含まれる侮蔑的なニュアンスと、それが読者に支持されているというこのギャップは興味深いものである。

わたしは社会学には、この新聞の社会面と大いに似通ったところがあるように思う。社会学は政治学や経済学や法学や経営学や国際関係論などとともに、社会科学の一つの分野をなすものと理解されている。その際社会学以外の諸学は、それぞれ固有の研究対象を有しているように映る。すなわち政治学にとっては政治が、経済学にとっては経済が、法学にとっては法が、経営学にとっては経営が、国際関係論にとっては国際関係が、それにあたる。これに対して社会学の研究対象としての社会は、あまりにも包括的である。たとえば政治や経済や法や経営や国際関係は、それ自体社会を構成する要素であるのである。したがって社会学のなかには、政治や経済や法や経営や国際関係を扱う領域が存在する。それはまさに、新聞の社会面に政治、経済、国際、家庭、文化、スポーツなどの報道が入り込んでくると対

応している。のみならず社会学では、各種のユニークな題材が取り上げられる。

たとえばサッカーやロックやカフェや婚活やスマフォは、立派な社会学の題材なのである。ということから社会学者が、自分の学問のことを「雑学」と称することも少なくない。そして学問の世界で、社会学Ⅱ「雑学」風の学問という評判は結構定まっている。しかし社会学者が自分の学問を「雑学」と称するのは、一種の謙遜けんそんである。むしろそれは、社会学者の強烈な自負の表れと見ることもできる。その自負は次のように表すことができるであろう。すなわち社会学は、社会で生じる出来事をトータルに扱う学問である。そして社会学者は、そのような貪欲な探究心をもつ人間である、と。さらに忘れてはならないことは、この学問がそれなりに人々から支持されているらしいということである。それを知るには大型の書店や図書館の社会学のコーナーに行つて、この分野の広大さを確認していただくといよい。あるいはまたインターネットで、社会学の関連ページを閲覧ブラウザシテしていただくのもよい。

わたしの場合は社会学に対する人々の支持を、例年身をもつて認識する機会がある。わたしは大学で、社会学を教えることを仕事にしている。そしてわたしの大学のカリキュラムでは、社会学は人気科目の一つである（それは他大学においても、概ねおおむねそうであろうとわたしは思っている）。とりわけ学期の最初の授業に集まる学生たちの表情を見ると、この科目が学生たちの何らかの期待を集めているらしいことを感ずる。必ずしもそれは、この科目が多少与くみし易やすそうだという期待にはとどまらない。この科目から自分が現に生きている社会に

ついで何らかの見かたが得られるのではないか、という学生たちの期待をわたしは感ずるのである。このような学生たちの期待にわたしが十分に応えているのかどうかについては、あまり自信がない。しかし例年めぐってくる学期の最初の授業は、わたしに一つのことを再確認させてくれる。——つまりは社会学には、明確な存在理由があるのである。

●——ネズミを捕るネコ

本書は社会学の入門者のために書き下ろした、社会学の概説書である。本書の読者が社会学を専攻しているか否かということは、ここではまったく問わない。いずれにしても社会学の入門者に、「社会学の何であるか」を明示し、伝達することが本書の所定の目標である。そのため本書は、あえて単著という形式をとる。今日のわが国では社会学の概説書は、一般に共著の形式で出されている。それは複雑に分化した社会学の現況を正確に伝えるには、その形式がふさわしいからであろう。しかし共著であるがゆえに、書物の全体を貫く明快なコンセプトを見いだすことが難しいというのが実情である。元々概説書に、そのようなコンセプトを求める必要はないという見かたもあるかもしれない。しかし概説書であればこそ、そのようなコンセプトが必要であるともいえるのである。事実欧米諸国では、一人ないしは少数の著者が全体を書き切った社会学の概説書が今日でも数多く出されている。

しかしまた本書の目的は、わたし個人の社会学の体系をここで提示することにあるわけで

はない。そのような仕事はこれまで、どちらかといえばたいか大家の社会学者によってなされてきた。そしてそれが、社会学の重要な共有財産となつていくことについてわたしに何の異論もない。しかしわたし自身の力量の問題を棚上げていえば、そのことがこでのわたしの関心事であるわけではない。むしろコンパクトな書物で、社会学の全体的な見取り図を提示することがこでのわたしの目的なのである。そのために本書は以下のような構成をとる。まず各章では、社会学の基本的なテーマを順次取り上げる。そして(1)そのテーマの基本的な構図を解説し、(2)それをめぐる社会学の代表的な学説を紹介し、(3)それをめぐる今日のわが国におけるアクチュアルな問題を検討する、という順序で議論を展開する。さらに各章を貫いて、本書が全体として一つのストーリー性をもつように配慮した。

ここで本書におけるわたしの理論的立場について、若干じやっかん触れておきたい。しかし概説書である以上は、まず「理論とは何か」ということから話を説き起こしたい。一般に理論は、現実を説明するための装置として理解されている。さしあたりそこでの理論と現実の関係は、ネコとネズミの関係に置き換えることができる。——すなわち現実をネズミとすれば、ネズミを捕るネコが理論である。そしてネコの良し悪しは、ネズミをどれだけ捕ることができかで決まるのである。しかしそれは、あまりにも単純な理解かもしれない。というのもそこでは、理論と現実の間に明確な一線がひかれているからである。これに対して今日では、それとは異なる見解が有力である。本来理論と現実は分かちがたく結びついている、という見

解がそれである。つまりはいかなる理論をとるかによって、現実異なる相貌をもって立ち現れるというのである。この場合ネコの、いや理論の良し悪しの判断は難しい。

というのはそれぞれの理論は、それぞれの社会観を基盤にしているからである。たとえば**社会学の創始者**はだれか、という一つの問題がある。この一見何の変哲もない問題が、時として**社会観の相克の舞台**(アリーナ)となるのである。一般に社会学の創始者は、フランスの哲学者A・コントであるといわれている。かれは『**実証哲学講義**』という書物のなかで、「社会学」(sociologie)という言葉を提案したのである。その書物のなかでコントは、**三段階の法則**を提唱した。それは人間の知識が、神学的・形而上学的・実証的という三つの段階を経て発展するというものである。コントは社会学を、この三つの段階の最後の**実証的段階**に対応する学問として提唱した。コントが生きたのは、フランス革命後の混乱した時代のなかであった。かれは社会の再組織化のために、実証的な科学として社会学を構想したのである。しかし社会学の創始者を、コント以外に求める立場もないわけではない。

たとえばイギリスの哲学者、政治思想家T・ホッブズは、政治学ではよく取り上げられる人物である。ホッブズは「万人の万人に対する戦い」としての自然状態を克服するために、社会契約による主権国家(リヴァイアサン)の樹立を主張した。興味深いのは社会秩序の成立を最初に理論的に説明した人物として、かれを社会学の創始者とする社会学者もいることである。あるいはまたアカデミックな社会学の創始者として、E・デュルケームやM・ウェ

パーの名前があげられることもある。というのもコントやホップズは、今日のいわゆるアカデミクな社会学者ではなかったからである。のみならずデュルケムとウェーバーの二人が、今日にいたる社会学の理論的基礎をかたちづかったことは間違いない。さらにいえばアメリカの社会学者T・パソンズは、現代社会学史上重要な存在である。構造機能分析の創始者であるかれを、現代社会学の創始者と見ることもできないわけではない。

● 公平な観察者

いったいこれら五人のなかで、本当の社会学の創始者はだれであろうか。これら五人を社会学の創始者とする主張は、それぞれに理論的根拠をもっている。つまりはそこでの見解の相違は、それぞれの社会観の相違に基づくものである。したがってわたしたちが、そのいづれかに軍配をあげることは容易ではない。そしてそれは、社会学の世界でわたしたちが頻繁に直面する状況である。というのは社会学の世界では、一つの現実の解明のために複数の理論が待機していることは通例であるからである。この場合現実が、ある理論によって解明されたとしよう。しかしそれは、つねに別の理論によって解明される余地を残しているのである。その意味では社会学の世界は、一つの不確実な世界である。しかしわたしは、そこに社会学の最大の魅力の一つがあるのではないかと思う。というのは複数の理論的立場が共存していることは、社会学が自由な議論の舞台であることを示しているからである。

この議論の舞台は当然、学問のルールによって制約されている。そのルールのなかには社会学の入門者にとって、まどろっこしく映るものがあるかもしれない。しかし学問の世界にルールがあるのは、スポーツの世界にルールがあるのと同じである。そしてスポーツの世界にも、一見まどろっこしいルール（ボールを手で扱ってはならないだの、ボールを前に投げてはならないだの、という）は多々あるのである。学問のルールもスポーツのルールと同様に、ゲーム（学問の場合は議論を媒介とする）を成り立たせる前提条件なのである。そのことを断った上でわたしは、社会学は比較的多くの人々が自由に議論に参加できる学問分野ではないかと思う。たとえばさきあげた、サッカーやロックやカフェや婚活やスマホといった社会的な題材がある。もし社会学の入門者がこれらについて興味深い見解を提示するとき、かれまたはかの女はすでに社会学の議論の舞台上上がっているのである。

そしてそれは、社会学の教師が学生の答案の採点時などに時々経験することでもある。さてここで、本書におけるわたしの理論的立場について一言述べておきたい。さきにわたしは、本書の目的が社会学の全体的な見取り図を提示することにあると述べた。言い換えればそれは、さまざまな理論が共存する社会学の状況をありのままに提示することである。———実際ここでのわたしの立場は、公平な観察者（impartial spectator）とでもいべきものである。もし社会学の世界に、公平な観察者がいるとすればいかなる存在であろうか。いま舞台の上では、さまざまな社会観の相克のドラマが演じられている。その際公平な観察者は、このド

ラマの観客 (spectator は観客をも意味する) である。したがって舞台の上で自分の社会観を言い立てることは、公平な観察者の仕事ではない。むしろ公平な観察者の仕事は、客席から舞台の上で演じられるドラマを余すところなく読み解くことである。

このような立場は一般に、ネガティヴな文脈で理解されている。たとえば当事者に対して、傍観者が一段低く見られるのはそれにあたる。しかしわたしは、公平な観察者をネガティヴな存在とは理解していない。この用語をわたしは、古典派経済学の始祖といわれる A・スミスから学んだ。スミスには『国富論』のほかに、『道徳感情論』という著作がある。スミスはそこで、観察者という概念を提示した。それは行為者に対置されるもので、公平であることを属性としている。『道徳感情論』でスミスは、行為者が利害関心を抑えるのはなぜかと問う。それは行為者が、観察者の共感 (sympathy) を得ようとするからである。その意味で観察者の存在が、社会の安定に一役買っているというのがスミスの主張である (なおスミスは、観察者もできるだけ自分を行為者の立場におかなければならないという)。それは観察者を、よりポジティヴな文脈で理解しようとする見解として注目に値する。

いずれにしても本書におけるわたしの理論的立場は、この公平な観察者にあたる。いや正確にいえば、そうありたいとわたしは願っているのである。社会はそれ自体、社会という舞台で演じられるドラマとしての性格をもっている。ドラマが製作者、脚本家、演出家、出演者、音楽家、美術家、衣装係、照明係、宣伝係その他の多数の人々によって作り出されてい

るように、社会というドラマの関係者も多数である。というよりもそれは、ほとんど無数と
いったほうがよいであろう。その意味では社会学が、社会で生じる出来事をトータルに扱う
というのは見果てぬ夢にすぎない。そのような夢をいだけ社会学者は、ドン・キホーテにも
比すべき存在なのかもしれない。しかし社会学者は、そのような存在として社会というドラ
マのなかで一定の役割を果たしているとわたしは思う。もしか来またはかの女がいなければ、
社会はいまよりも多少は窮屈で、面白みを欠いたものになっているであろう。

さて本書では、以下社会学の基本的なテーマを順次取り上げていく。あるいは読者のなか
には、そこに続々と登場する専門用語 (term) に閉口する向きもあるかもしれない。しかし断
つておきたいのは、そのような専門用語は社会学において重要な位置をしめているというこ
とである。さきに述べたように社会学では、理論を装備して現実に接近する。その際理論の
中心にあるのが、そのような専門用語である。たしかにそれは、想像の世界の産物である。
しかしそれは、社会学が現実の世界と切り結ぶための有力な武器なのである。——といいな
がらもわたしは、社会学が理論偏重の傾向をもつことを認めざるをえない。ゲーテの『ファ
ウスト』でメフィストフェレス (知識の無力に絶望した学者ファウストを、現世の享楽へと
誘惑する悪魔) は学生に対して次のようにいう。「すべての理論は灰色で、生命の輝く木は緑
だ」と。それはいまでも、社会学者にとって頂門の一針となるものかもしれない。にもかか

わらずあなたはいま、社会学の門をたたこうとしている。

門をたたく者には開かれる